



林豹吉郎 篇2

天誅組、一日にして逆賊へ

天誅組が五條を選んだのは、吉野・十津川などの勤王(天皇に忠義を尽くすこと)にゆかりが深いところであるとともに、軍事的に有利な位置にあるためでした。また、代官所は軍備も少なく、占領する意味が大きいことを狙ったのでした。

天誅組「五條御政府」の設置を聞きつけ、大和国内では尊王攘夷に心を寄せていた人々が新たに天誅組に加わりました。このなかに、宇陀松山(拾生)出身の林豹吉郎がいました。豹吉郎は、医学者・蘭学者の緒方洪庵のもとで蘭学を修めました。その後、兵衛家の江川太郎左衛門のもとで砲術を学び、のちに大和郡山藩に招かれ、大砲の製造を行っています。

天誅組が五條代官所を襲撃した翌日(8月18日)、京都では政変が起りました。会津藩・薩摩藩・公武合体派の公家らが、長州藩・尊王攘夷派の公家らを京都から追放したのです。この事件によって、尊王攘夷派は失脚し、この一派が計画した孝明天皇の大和行幸は、中止となってしまいました。挙兵の大義名分を失った天誅組は、一日にして暴徒・逆賊とされ、幕府から追われ、討ち取られる立場となっていました。

その後、天誅組は、幕府と戦う方針を固め、本陣を天辻峠(五條市)に移しました。十津川で兵を募り、8月24日には1000人近くの十津川郷士が集まりました。一方、幕府は、諸藩に命じて天誅組の討伐を開始します。

8月26日、天誅組は高取城を攻撃しますが、高取藩の大砲などの砲撃を受けて大敗しました。林豹吉郎は、本陣で松の大砲を造りますが、高取城攻めでは、大砲は松ヤニのため、弾は出なかったといわれています。

